

西東京グラウンド再整備を契機とした学校構造の再編

— 地域の中で機能する学校への移行と課題 —

副校長 深町公一

1. 研究の目的と問題意識

本稿は、西東京グラウンドの再整備を契機として、本校の教育構造および学校の社会的役割がどのように変化しつつあるのかを検討するものである。1960年の造成以来、西東京グラウンドは部活動の拠点として機能してきた。しかし2024年の改修工事および西東京市との包括連携協定締結を経て、その位置づけには質的な変化が見られる。それは単なる施設更新にとどまらず、学校という存在の在り方そのものに関わる動きである。本校は創立以来、社会と接続する実学教育を基軸として歩んできた。

本稿では、その歴史的連続性を踏まえながら、

第1章 場の原点

第2章 構造の転換

第3章 学校の再設計

という三段構成により、西東京グラウンドを軸とした学校変容の過程を記録し、今後の課題を展望する。

2. 西東京グラウンドを軸とした学校構造の再編

2-1 西東京グラウンドの来歴 — 志が土地をフィールドに変えた —

① 土地の記憶 — フィールド以前の風景

現在の西東京グラウンド周辺は、昭和初期までは農地と用水が広がる地域であった。千川用水が流れ、畑地と雑木林が混在し、武蔵境通りと鈴木街道に挟まれた土地である。



写真1

西東京グラウンド周辺（1938年頃）

出典：地図・写真閲覧サービス

1938年（昭和13年）の土地宝典や航空写真には、宅地化以前の姿が確認できる。この土地は、最初から学校の敷地だったわけではない。人が暮らし、働き、行き交う、地域の日常の一部で

あった。その後グラウンドになっても、「地域の中にある場所」という性格は変わっていない。西東京グラウンドを考えると、まず押さえるべき前提である。

② 私立鉄道学校としての創立 — 社会と接続する教育の原点 —

岩倉高等学校は、1897年（明治30年）に「私立鉄道学校」として創立された（公式沿革）。近代日本の発展を支える鉄道事業に必要な、実務能力と規律を備えた人材と未来社会を変えうる人材の育成が設立目的としていたとされる。こうした設立の経緯から、本校は創立当初より社会と接続する教育を志向して出発したと考えられる。教育を社会から切り離さず、現場と接続した学びを重視する姿勢は、普通科設置や共学化を経た後も学校の根幹を成している。西東京グラウンドが築かれていった過程もまた、この社会と接続する教育の延長線上に位置づけることができる。

③ 1960年 — 手をつくったフィールド —

1960年（昭和35年）、野球部の育ての親である北島善次郎先生のもと、西東京の地でグラウンド造成が始まった。



写真2

西東京グラウンド造成期（1961年頃）

出典：地図・写真閲覧サービス

当時は雑木林が広がり、業者による伐採後も切り株が残る状態であった。インタビュー座談では、次のような証言が残されている。

「ブルドーザーで木を倒したあと、切り株をロープで引き、端へ寄せた。」

「砂利や石を拾い、ローラーをかけ、土を入れてはならず。それを何年も続けた。」

授業は14時台に終わり、生徒は中央線で移動し、整備と練習を繰り返した。当時は軟式野球部として一年次に100名を超える新入生が入部したが、二年次の新チームから硬式野球部へと転換した。造成作業と競技活動を同時に担う厳しい環境の中で、卒業時に残ったのはわずか7名であったという。この数字は、当時の野球環境や社会状況の厳しさを物語っている。フィ

ールドは与えられたものではなく、生徒たちが自らの手で整えたものであった。

④ 証言が語る造成期 — 創成への歩み —

昭和 36 年の岩倉高校生徒会報（第一号）には、「耕地一万坪を開拓し、昨年 8 月グラウンド完成」と記されている。軟式から硬式への転換、甲子園を目指す方針転換が行われたが、資金は潤沢ではなかった。OB の手弁当、地域企業の協力、プロ野球関係者から譲られた練習球、仮設的な合宿所など、多方面の支援に支えられていた。当時の証言には次のような言葉も残されている。

「強くなれなかったのは才能の問題ではない。」

「やらなければならないことが多すぎた時代だった」

と語られている。それでも志は失われなかった。諦めずに積み重ね続けたその歩みは、25 年後、甲子園出場という形で実を結ぶ。それは単なる造成の時代ではなく、野球部の創成期でもあった。その志は、時代を超えて受け継がれていく。



写真 3 硬式野球部造成期を伝える『岩倉高校生徒会報』第 1 号（1961 年 3 月 24 日発行）

出典：個人所蔵資料（証言者提供）

⑤ 再整備と志の連続性 — 変わるもの、変わらないもの —

2024 年 3 月、西東京グラウンドは人工芝化を含む大規模リニューアルを迎えた。安全性の向上、競技力の強化、地域利用の拡張が図られた。西東京教育推進部部長による 2024 年度の総括には、「環境が整ったことで責任も増した」と記されている。環境が整ったからといって、努力そのものが不要になるわけではない。むしろ、それは「この場所で何を育てるのか」という問いを改めて突きつける契機となった。60 年前の整地作業と 2024 年の人工芝は、一見すれば異なる風景である。しかし両者を貫いているのは、「自らの手で場を育てる」という姿勢である。形は変わっても、その志は連続している。

⑥ 場が宿す教育思想

西東京グラウンドは、造成期を経た後も、日々の手入れと反復によって守られてきた。その営みは単なる維持管理ではなく、「場を大切にする」という態度の継承であった。学校という場は、そこに集う人々の関係や振る舞いを静かに形づくる。西東京グラウンドもまた、単なる運動施設ではない。人が集い、挑戦し、失敗し、語り合い、やがて巣立っていく。時間と記憶が積み重なり、世代を超えて受け継がれていく場である。それは、創立以来続く「社会と接続する教育」が、現在も実践されている姿である。

⑦ 本節の総括

西東京グラウンドは 1960 年、志と労苦によって造成された。それは同時に、野球部の創成期でもあった。そこには、1897 年の創立以来続く、社会と接続する教育の姿勢は、現在も受け継がれている。農地として耕されていたこの地は、やがて雑木林を切り拓いてグラウンドとなり、土の時代を経て、幾度もの整備を重ねながら姿を変えてきた。しかし、変わらなかったものがある。それは、自らの手で場を育てるという志である。この志の連続こそが、西東京グラウンドの来歴を貫いている。

2-2 西東京グラウンド再整備と学校構造の転換 — 地域の中の学校へ —



写真 4 2024 年改修後の西東京グラウンド全景

① 改修工事と教育構造の再設計

2024年3月、西東京グラウンドの大規模改修が一区切りを迎えた。本改修は、競技環境の向上のみを目的としたものではなく、教育の在り方を見直す契機となる取り組みでもあった。すなわち、施設整備を通して学校の構造を改めて考える機会となったといえる。サッカー・ラクロスフィールドは全面人工芝化され、LED ナイター照明が新設された。

さらに野球場管理棟、フィールドセンター、クラブハウス、室内練習場が新たに建設された。野球場ネットについては改修が行われた。これらの整備は、単なる設備の更新にとどまらず、本校がこれまで大切にしてきた志を具体的な形にする取り組みである。岩倉スピリットが掲げる「仲間とともに、主体的に学び、考え、創造し、行動できる人物」の育成を支える基盤となっている。

② 再整備がもたらした意識変容

公式戦が行われる人工芝フィールドや照明の整った夜間環境、振り返りを行うフィールドセンターなどが整備されたことで、活動と学びは同じ場の中で結びつくようになった。この環境の変化は、生徒の姿勢にも影響を与えている。準備を丁寧に行うこと、用具や場所を整えること、時間を守ること、仲間と場を共有する責任を意識することが、日常の中で求められるようになった。公式戦仕様の環境で日々を過ごすことは、日常そのものに適度な緊張感を生む。

フィールドはもはや単なる「練習する場所」ではない。人を育てる環境としての役割を担い始めている。環境が変わることで、そこに立つ人の振る舞いも変わる。その変化が、確かに起きている。

③ 文武非二の現在



写真5 フィールドセンターにおける振り返り活動

本校の理念である「文武非二」とは、勉強と部活動を切り離さないという考え方である。西東京グラウンドでは、その考え方が具体的な仕組みとして形になっている。フィールドでの実践をフィールドセンターで振り返り、総合探究の授業で言語化し、再び実践へとつなげていく流れが構築されている。この流れは偶然に生まれたものではない。実践したことを振り返り、言葉にし、次の行動につなげることができるよう、授業や活動を組み立ててきた結果である。そのため、文武非二は掲げるだけの理念ではなく、日々の教育の中で実際に行われている取り組みとなっている。

④ 包括連携と地域接続の制度化

2024年3月11日、本校は西東京市と包括連携協定を締結した。これにより西東京グラウンドは、校内施設という位置づけにとどまらず、地域と教育を結ぶ拠点としての役割を担うこととなった。地域行事への参加、スポーツイベントの共催、教育活動での連携は、単発の交流ではない。あらかじめ仕組みとして位置づけられた、継続的な取り組みである。

包括連携協定の締結により、本校の地域との関わりは、個別のつながりから、継続的な連携へと形を整えた。西東京グラウンドは、地域の中で教育を実践する拠点として、その機能を広げつつある。

⑤ 校内教育実践の再編



写真6 人工芝フィールドを活用した体育授業の様子

(1) 総合探究の再設計

校内教育実践の再編は、総合探究の取り組みにも表れている。総合探究の最終目標は、「地域に応援される岩倉高校スポーツクラス」の実現である。ただし、その探究は学年ごとに異なる段階とテーマをもって展開されている。

1年次は「西東京市を知る」ことを起点とし、地域理解を深める。

2年次はフィールドワークや地域行事への参加を通して、地域との関係を築く。

3年次は自ら企画・実行する段階へと進み、成果を後輩へと引き継ぐ。

2月に実施する招待イベント（岩倉 SP）は、各学年の探究活動の成果が具体的な行動として表れる場である。フィールドでの実践を振り返り、言語化し、再び実践へとつなげていく流れは、学年ごとの個別探究の中で積み重ねられている。これは単に活動の数を増やしたということではない。生徒一人ひとりが、自ら問いを立て、地域と関わりながら実践を重ねる構造へと再設計された点に意義がある。

（2）体育で育てる協働と責任

校内教育実践の再編は、体育の授業にも及んでいる。体育の授業では、授業と評価を一体化した設計を基本とし、グループワークを中心に展開している。生徒はチームごとに役割を決め、戦術を考えたうえで実践に取り組む。評価は結果だけでなく、話し合いの過程や役割の遂行、仲間との関わり方も含めて行っている。活動後には振り返りの時間を設け、自らの判断や協働のあり方を言葉にする。仲間の考えを聞き、自分の考えを伝え、互いに支え合う関係は、授業の中で日常的に育まれている。

このような実践は、単なる技能向上を目的としたものではない。協働する力と、自らの役割に責任をもつ姿勢を育てるための再構成である。教え合い、学び合う関係が広がる授業の姿は、本校が目指すコンヴィヴィアルな学びを具体的に示している。

⑥ 多世代をつなぐ拠点としての役割

西東京グラウンドでは、子どもから高齢者まで、さまざまな世代が活動している。ラクロスのイベントやスクール活動、幼稚園・保育園との体験活動、高齢者によるグラウンドゴルフなどが行われ、同じ場所を複数の世代が共有する風景が日常となっている。こうした取り組みの一部は、総合型スポーツクラブ「セリオス」の活動拠点として展開されている。生徒が直接関わらない活動もあるが、多世代が行き交う場であること自体が、この場所の特徴である。

このような状況は、西東京グラウンドを学校内部の施設にとどまらない存在へと広げている。地域の中で世代をつなぐ拠点として機能することで、学校の役割もまた広がっている。

⑦ 理念の具体化

本校は「正心第一」のもと、「CONVIVIAL SCHOOL」をスクールミッションとして掲げている。アドミッション・ポリシーは、誠実で礼儀正しく、夢に挑戦する生徒を求めている。グ

ラデュエーション・ポリシーは、「新時代に輝き活躍できる人材の輩出」を目標とする。その具
体像として、本校では「5ISM (Interest・Initiative・Interactive・Inventive・Influential)」
の育成を掲げている。これらは理念として掲げるだけでは十分ではない。日々の教育活動の中
で具体的に表れていることが重要である。

西東京グラウンドを中心とした教育実践では、生徒が問いを立て、調べ、発表し、仲間と協
力しながら活動する姿が見られる。地域との関わりの中で、自分の立場を考えながら行動する
場面もある。こうした経験の積み重ねが、本校の掲げる人物像を日常の行動へと結びつけてい
る。生徒は活動を振り返り、自らの言葉で整理し、次の行動へとつなげていく。理念は特別な
場面で示されるものではなく、日常の実践の中で育まれている。

⑧ 本節の総括

西東京グラウンドの再整備は、単なる施設改修にとどまらない取り組みであったと考えられ
る。環境整備、包括連携の締結、総合探究の再設計、体育における授業の見直し、地域クラブ
との協働。これらはそれぞれ別の取り組みであるが、共通しているのは、学校を地域の中で機
能する存在として位置づけ直そうとする動きである。

西東京グラウンドは、運動の拠点にとどまらず、教育と地域が関わり合う場としての役割を
広げつつある。そこでの実践は、IWAKURA ビジョン 130 を日常の活動の中で具体化する取
り組みである。今回の再整備は、施設の更新であると同時に、学校のあり方を改めて問い直す
契機となった。本章で述べてきた取り組みは、その歩みの現在地点を示すものである。

3. 岩倉高等学校の未来 — 教育と地域をつなぐ拠点へ —

3-1 進みつつある学校のかたち

2024年3月、西東京グラウンドの改修工事が完了した。人工芝化やナイター照明の整備、
フィールドセンターや室内練習場の新設、野球場ネットの改修などが行われた。同年には西東
京市との包括連携協定を締結し、総合探究も地域との関わりを意識した内容へと見直されてい
る。岩倉祭を西東京グラウンドでも開催する取り組みや、総合型スポーツクラブ「セリオス」
の活動拠点となっていることも、その流れの一つである。これらは、学校が地域の中で役割を
果たす存在へと変わりつつあることを示している。

3-2 地域の日常に組み込まれる学校像

目標は単にイベント拠点となることではない。地域の日常に位置づけられることである。
2030年の西東京グラウンドの一日は、次のような姿を思い描くことができる。

午前には、地域の高齢者が定期的なプログラムとしてフィールドを歩く。午後には、体育の授業で生徒が戦術を考え、対話を通して改善を重ねる。放課後には、部活動が日々の練習を積み重ねる。夕方には、小学生がスクールに通い、保護者がフィールドセンターで交流する。夜には、スタッフや地域関係者が一日の活動を振り返り、情報を共有する。

それは特別な行事の日ではなく、地域の予定に自然に組み込まれたある一日の姿である。世代が入れ替わりながら活動が続いていく。取り組みが一時的なものではなく、継続的な営みとして根づいていく。そのような状態が整ったとき、学校は地域社会の中で役割を果たす存在として、より確かな位置を占めることになると考えられる。



写真7 多世代が同時に利用する西東京グラウンドの様子

3-3 歴史の流れの中での再整備

岩倉高等学校は、1897年の創立以来、社会と接続する教育を大切にしてきた。運輸科の設置や鉄道関連企業との関係、確かな就職実績は、その歩みを示している。学校の学びが社会や仕事とつながることを前提に、教育が行われてきた歴史がある。西東京グラウンドの取り組みも、その延長線上にある。これまで就職という形で社会と直結してきた学校が、地域との関わりという形へと広がりつつあると見ることができる。

1960年、生徒が自らの手で切り株を引いた。

2024年、施設の整備が進められた。

時代は異なるが、社会と接続しながら学校をつくっていく姿勢は変わらない。社会と接続する教育。現場とともに歩む学校。その歩みは、形を変えながら続いている。

3-4 西東京グラウンドが示す学校のあり方

西東京グラウンドは、クラブ活動だけで使われる施設ではない。地域の中で役割を果たす拠点となり得る存在である。人工芝化や照明整備により利用の幅は広がり、世代を超えて人が集う場となった。地域との関わりも、継続的なものへと整えられつつある。

重要なのは、その進め方である。理論を先に掲げて方向転換したというよりも、日々の教育活動や地域との関わりの中から必要性が生まれ、その積み重ねの中で学校のあり方が形づくられてきたと考えられる。考えが先にあったのではなく、現場の歩みの中で考えが整理されてきた。

3-5 地域との関わりを継続するための課題

2024年の再整備は一つの節目ではあるが、完成ではない。再整備が一区切りを迎えた今、学校と地域との関わりをどのように続けていくかを考える段階にある。地域との連携は、善意やその場の熱意だけでは続かない。定期的に話し合う場を設けること、役割を明確にすること、利用のルールを整えること、活動の記録を残すことなど、継続するための仕組みが必要である。また、担当者が変わっても取り組みが途切れないよう、引き継ぎの体制を整えることも欠かせない。学校だけが動くのではなく、地域とともに取り組んでいく姿勢が求められる。整備が進んだ現在は、量よりも関係の質と継続性が問われる段階に入っている。

今後も対話を重ねながら、そのあり方を整えていくことが求められる。

3-6 本章の総括

西東京グラウンドの再整備は、施設を新しくする取り組みであると同時に、これまでの歩みを見つめ直す機会となったと考えられる。環境を整えることや、総合探究や体育の見直し、地域との関わりを広げる取り組みは、それぞれ別の動きのようにも見える。しかし、どれも学校を地域の中で役割を果たす存在にしようとする取り組みであるといえる。建物や仕組みは変わり、関わる人も入れ替わっていく。その中で、地域との関係をどのように続けていくかが、これからも大切になる。本章は、その途中の姿を記したものである。

3. これからの学校像をめぐって

西東京グラウンドの再整備を経て、学校の風景は少しずつ変わり始めている。整ったフィールドで生徒が活動し、語り合い、地域の方々が同じ場所を行き交う。その日常の中に、学校が地域の中で役割を担おうとする姿が、静かに形を取り始めているように感じられる。本校が大切にしてきた「文武非二」という考え方も、この環境の中で改めて意味を持ち始めているのではないだろうか。学びと活動を切り離さず、教室とフィールドを行き来しながら成長していく。

その姿が、地域との関わりの中で少しずつ広がっているようにも思われる。

目指しているのは、施設の充実そのものではない。地域の中で自然に必要とされる学校へと歩みを進めていくことではないだろうか。生徒が地域と関わりながら学び、地域が学校を身近な存在として受け止める。その関係が続いていくとき、「CONVIVIAL SCHOOL」という言葉も、理念にとどまらず、実感を伴ったものになっていくように思われる。もちろん、すべてが整ったわけではない。仕組みをどう保ち、世代を超えてどう引き継ぐかは、これからの課題である。それでも、この場所には、次の時代へとつながる可能性が芽生えているように感じられる。西東京グラウンドの歩みは、まだ途中にある。

この場所には、次の時代へとつながる手応えが、確かに生まれつつある。

謝辞

本稿作成にあたり、1960年前後の西東京グラウンド造成期を知る卒業生の皆様に座談会形式で貴重な証言を賜った。当時の状況や心境を具体的に語っていただいたことは、本稿の来歴分析において重要な示唆となった。ここに記して深く感謝いたします。

(座談会参加者)

本田 勝利 (昭和 33 年度卒業・軟式野球部)

小堺 輝夫 (昭和 35 年度卒業・硬式野球部第 1 期生)

水村 行男 (昭和 35 年度卒業・硬式野球部第 1 期生)

参考資料

岩倉高等学校「沿革・校歌」岩倉高等学校ウェブサイト. <https://www.tky-iwakura-h.ed.jp/intro/history/> (2026 年 2 月 28 日閲覧)

西東京市・学校法人明昭学園岩倉高等学校 (2024)「西東京市と学校法人明昭学園岩倉高等学校との包括連携協定」西東京市ウェブサイト. (2026 年 2 月 28 日閲覧)
https://www.city.nishitokyo.lg.jp/siseizyoho/npo_kyodo/daigaku_kyodo/iwakura.html

国土地理院 (刊行年不明)「地図・空中写真閲覧サービス」国土地理院ウェブサイト.
<https://service.gsi.go.jp/map-photos/> (2026 年 2 月 28 日閲覧)

岩倉高等学校生徒会 (1961)『岩倉高校生徒会報』第 1 号 (1961 年 3 月 24 日発行) [個人所蔵資料].